



I はじめに

分散会基調は、大会の基調と討議課題をもとに提案された。始めに、協力者から、学校現場の現状と重ね合わせて、「進路保障は同和教育の総和」について提起し、その後、討議の柱や分散会の進め方が確認され、報告・討論に入った。

II 報告及び質疑討論の概要

－報告1－⑬

【発見】があふれる学校にしたい! ～共に生きる社会に向けて私自身ができること～
(埼玉県人教)

－主な質疑と意見－

協力者 この後の意見交流について、以下の3つ柱に基づき意見交流を行うことを確認する。

1. 各地域の研究会、地域の学習会の実践や、そこに関わった教員の変容について
2. どのように人権文化を醸成し、仲間、教職員集団をつくっていくかについて
3. 特別支援教育に関わり、「分ける」あるいは「支援」に関しての悩みや実践について

高知 元中学校教員として、今現在小中学校の学習支援という立場で学校に関わっている。特別支援学級に関わるようになり、その子どもたちを見る自分の目や考え方の変化はあったか。また、この解放教育研究会っていうのはどこが主催してどういう活動をしているのかということを見せてほしい。さらに、「なぜ私たちはどうして分けられているの」って聞かれたら、自分は今のところ「大人の事情」しか言えない、もう言いようがないのだが、どのように子どもに答えるか。

報告者 特別支援学級を担当する前の自分は、子どもの本当の言葉を聞けてなかったと思う。特別支援学級の少ない人数の子どもたちと関わる中で、子どもの本音というのを知ることができるようになったと同時に、今まで担任してきた子どもたちの本音を聞けていなかった自分が浮き彫りになった。この学級の子どもたちみんな、もう本当に「嫌なもの嫌だ」と言うし、やりたくないって逃げ出す時もある。そういう中で、その子がなぜそれが嫌なのか、本当にじっくり話したり、呼吸をこちらから読んでいかないとわからないと思った。自分自

身がちょっとイライラして怒ったりもあったので、本当にこの呼吸の中に宝が眠っているとを感じる。こちらの気持ちを和らげてくれている子どもたちでもあり、気持ちにじっくり向き合って、とことん付き合いたいと思うようになった。

2つめの解放教育研究会は、元々は地域というか、公的な機関と手を繋いでやってきたもので、もうかれこれ15年ぐらい経つ。法が切れたが、解放教育が大事にしている部分を絶対になくさないようにしようということで、先輩たちが手弁当で、再出発させた研究会である。1年に1回劇をやるということで、みんなで一緒に脚本を考えながら朗読劇を行っている。そのほか、フィールドワークをしたり、ムラについての知識を深めたり、私も一緒に楽しく活動している。

大阪 他の都道府県のことは勉強不足でわからないが、大阪の小学校とか僕がいた小学校とかは、支援学級に在籍している子どもも基本的には教室で授業を受ける。そして、その子、その子に合うように、支援学級で、個別の授業を受ける形を取っている学校が多いと思う。多分、大阪が他の都道府県とちょっと違うやり方をやっているのかもしれないが、「分ける」ということに対して抵抗がある。先ほどの話は、理解ができる部分がたくさんあった。その子どもにとって何が一番適切かを考えるためには、こっちのエゴだけじゃなくて、その子どもや保護者とちゃんと話して、何がその子どもにとっていいのか、最も適切な学びの場ってどこなのか、考えていかないといけないなっていうのが、今の僕の答えである。しかし、この時に気をつけないといけないなっていうことがある。子どもに「どうしたい」って聞いたら、子どもは、「支援学級に行つて勉強したい」っていうこともあるが、それは、もしかしたらそっちを選ばされているだけなのかもしれない。子どもは「そうしたい」と僕には言ってきたけど、この子が落ち着いて安心して授業を受けられるような環境が整った教室なら、選択肢が増えるのではないのか。子どもが支援学級でやりたいと言うから、それなら支援学級でやろうかと安易に考えてしまうのではなく、子どもが、いろんな選択肢がある中で選んでいるのか、ということを見極めていかないと思う。子どもが、少ない選択肢から選ばされたものを、自分の好みになってしまうことも、差別に繋がってしまうのではないだろうかと、考えが深まった。

－報告2－⑭

チームで支える・生徒の成長する姿 (奈良県人教)
－主な質疑と意見－

高知 教員ではないので、自分の経験から話をしたいと思う。つい5年前まで高校生だった。僕自身も中学2年間不登校経験がある。高校に入ってから、一通り通えるようになった。今回の報告もだが、先生たちは、自分がやりたいって思うものを、全力で応援してくれる、常に背中を押してくれる存在だ

ということだ。さらに、否定せずその子を待ってくれる。僕は小・中学校とか勉強がすごく嫌いでしたが、高校入ってとても学びたいと思うようになり、大学に行きたい、本当学んでみたいと思うような経験をする事ができた。それまでは、学校の中では、できる範囲が狭くて、本当にやりたいと思えることの背中を押してくれる先生がなかなかいなかった。高校ではいろんな先生が僕に関わってくれ、活動したいことを繋いでくれたことが、すごく貴重だったと思う。子どもに関わっていく中で、報告者自身が大変だったことがあれば、それを教えてほしい。

報告者 テスト前になったら、結構顔色がじっと変わって、職員室によく来るようになり、今もほとんど毎日職員室に来て、「先生」って声をかけてくれるんですが、本人に「どうしてそんなに頑張れるのか」と聞いたことがある。大学生への憧れという身近な目標、なりたい自分があることで、がんばれるのだと思う。自分でも調べたり聞いたり、集中して学ば姿勢に成長を感じる。また、その生徒がプログラミングの競技を受けようとしたとき、まずは自分がと、プログラミングの競技を受けてきてくれた先生もいる。今までは、先生が黒板で説明することが主だったけれども、最近は、グループワークに取り組み、色々な先生や生徒に、いろんなことを聞けるような環境をつくっている。それをきっかけに、その生徒を中心にクラスも変わるし、先生方の授業のやり方も変わってきたのが、今の学校の様子である。

－報告3－⑩

『練習中』という宝もの」（高知県人教）

－主な質疑と意見－

高知 教員2年目、担任をしている。うちの学校の子どもそうだが、子どもたちは、教員を納得させようと、様々なことについていろんな意見を出しながら、必死だったと思う。そこでは子どもの意見は、採用されなかったと思うが、「やらない」という子どもたちをどうやって納得させたのか。

学年4クラスあるということだが、報告にでた子どもに対して、その他の学級、他学年の生徒は、どのような関わりや思いがあったか。

報告者 1つめは、制服や髪型に関する事で、自分のクラスの意見としてあげた時、きちんと理由をつけて言えるものかどうか、一つずつ多数決を取っていった。確かに私たちはこれを望むんだけど、学校に正当な理由付けをして意見を出すのは難しいかもしれないと、子どもたちが納得していききました。2つめは、他のクラスや他の学年に、Aさんのことを知ってもらい、すすめました。隣のクラスの子と体育などその他の様々な授業で一緒になるので、授業に入る支援要員にも、まず、こういう子どもで、こういう支援が必要であることを伝えました。子どもたちにも、この子が困らないように、「ちょっと気にかけてほしい」と声をかけると、周りの

生徒から自主的な声かけがあって、自分たちで交流していた。本人自身がすごく明るい性格で、ぐいぐい自分から喋りに行くので、ある程度交流関係を持ち、学年の先生とも急に話すようになった。その繋がりについて聞いたら、小学校が一緒に、小学校の時には挨拶する仲だったので、中学校に上がって久しぶりだったが、挨拶をしたら、学校でも話すようになったということだった。本人自身も中学に上がってから、いろんな繋がりができ、すごく喜んでいた。

大阪 「練習中」という言葉だが、子どもたちに対して、報告者自身も失敗することがあるというところが良かった。私は、子どもたちの支援を失敗したくないと感じて取り組んでいたが、こういう形で「練習中やから大丈夫だよ」と言うことは、自分の今の現場に大事だと思って。特に中学校卒業し、高校生のステージに上がるころに関しては、その子の課題をしっかりと解決する力をつけていくことを感じている。具体的な取り組みについて教えてほしい。

報告者 報告した子どもに限らず、支援学級の生徒に学校としての支援には、放課後の学習支援がある。テストが近づいてくると、支援員だけでなく、自分も一緒に取り組んでいる。夏休みの課題を家でやるのが不安だということだったので、学校に来られる日には、学校に来て、一緒に宿題を進めた。それを聞いた他の生徒たちも来て、一緒に勉強をする姿もあった。

－報告4－⑨

「あなたが心配・・・。」（熊本県人教）

－主な質疑と意見－

大阪 「お前去年何してたんや」と言われて救われたという、恩師の先生との受け答え、恩師の先生がそれに対してどう思ったか、もう少し詳しく聞かせてほしい。今、教員になった報告者が、恩師と同じように野球部の生徒とどのようなやり取りをしたのか、聞きたい。

報告者 あんまりはっきりとは覚えてないが、1学年上に、同じように、他の学校を中退して、家庭環境は複雑で、生活がだいぶ乱れて、でも、入学し直して、今、頑張っている2年生の先輩がいた。そういう先輩がいるから頑張れよっていうようなことを言われたのを、覚えている。今振り返ってみると、その先生は、だから「お前もやれるよ」っていうようなことを伝えていたのかなと思う。

今の生徒とのやりとりについては、周りの生徒から「先生、あいつも去年は野球やったんですよ。入っていたんですよ」っていうのを聞いた。僕は、だいたい気さくに、どの生徒でも声かけていくので、その生徒にも声をかけた。すると、「去年、僕、練習しに行っていました」と返してくれて、話をしていくと、「うん、野球、この子好きなんだろうな。嫌いで辞めたんじゃないだろうな」と感じた。それで、もっと誘おうと思って、よく声をかけていた。

協力者 補足すると、再入学する前から、「この学校の先生も、前の学校の教師と同様に自分のことを偏見の目で見るとにちがいない」という思いがあった。しかし、監督さんの「やれるよ」の言葉があった。それが、自己肯定感が低い生徒が多い中で、やっぱり自信を持たせたいという思い、実践に結びついているということだ。

－報告5－①

今できることを一生懸命頑張る(大阪府人連)

－主な質疑と意見－

大阪 ご報告いただく中で、保護者支援の難しさで、自分も思い浮かべる子がいる。今学年で言うと大学生ぐらいになる子の保護者である。「この保護者に言っても仕方ない」と思いつつ、子どもには、地域も含めて、いろんな支援した。だけど、結局もう卒業して関係が途絶えてしまって、いろんな地域の支えとか、その後の繋がりもあったが、救いきれない子どものことを思い浮かべながら、「同じやなって保護者のことを喋ってしまっていた自分自身がいた。子どもの権利学習についても、自分の学校、残念ながらまだまだ全然できていない。報告の子どもには、いろんな課題があることが明らかになっているが、まだまだ明らかになってないことがたくさんたくさんある。遅刻 1 つとっても、自分の学校でも、地域のしんどさを教員は理解しているけども、その子どもたちの不適応行動だけでなく、適応行動、つまり大人から見て望ましいと思う行動すらも、その背景にある子どもの権利が守られてない状況があるということに、気づかないといけない。そうでないと、今日報告の中の課題も明らかになってこない。子どもの権利学習、全ての原点として、諦めることなく広めていかないといけない。そこをなんとかかしていこうって思える力をもらえた。

Ⅲ 総括討論

福岡 本当にどの報告も丁寧に取り組まれておられた。私は高校教員だから、小・中学校と違ってあんまり地域と交流できていないと日々考えることもある。家庭と繋がること、地域と繋がること、教育と繋がること、本当に繋がって大切だなと感じながら聞かせてもらった。保護者に電話をかけた時に繋がらないので、最近は携帯電話が多くて、携帯電話をかけても、切られているんじゃないのか、ブロックされているんじゃないのかというぐらい、かからない。家に行っても、なかなか会えないという状況の中で、「保護者と繋がろうと思っているのに、なぜ繋がれないんだろう、この子のこと、保護者は大事にしてないのかな」と、その保護者に責任を押し付けるように考えてしまっていたところがあった。しかし、いろんな話を聞いて、その保護者は電話があるってということだけで、すごくストレスを感じるにちがいないと思った。その保護者に寄り添うということ、本当にしっかり自分自身が考えていかなければいけないなと思いながら、聞くこと

ができた。高校だからできないと、かって思っていたが、もっともっといろんな先生と繋がって、情報を得るなど、自分が働きかけることによって、できることはいっぱいあると感じたところである。明日からの頑張りをもらって、いろんなことが自分にもできるんだと知って、頑張っていきたい。

愛媛 25人の通常学級の担任した後、特別支援学級の担任したが、最初すごく疎かになった。多分こんな思いを生徒たちも感じながら暮らしているだろうなというのを、自分自身がすごく感じながら11年やりました。やっぱり今も、多分そういう思いを持っているのだろうなと思う。やっぱり忘れてはいけないことは、社会の中には差別がたくさんあることだ。私たちが生きているこの社会は、差別社会だということ、僕たち自身が把握しておかないと、勘違いをしてしまう。大学を卒業する時に、小学校の時の担任の先生に、「来年から先生と同じ仕事をします」と挨拶しに行ったことがある。教員は、どうしても自分の経験がもとになって判断することが多いと思うが、それのみが正しいと思わないことがすごく大事だろうと思う。経験していないことを想像できない、想像力の欠如が、差別の1番の原因かなと思うので、その辺りのこともきちんと考えないといけないと思って、生活を送っている。学校の規則は誰のためにあるのか、教育は子どもを管理するためにあるのか、それとも成長のためにあるのか。その見方1つで、かなり変わってくるだろうなと思う。

大阪 報告の子どもことも知っているが、その子の弟の担任をしていた時の話をさせてほしい。弟は先ほどお話にも出てきていたが、学校にはなかなか来れていない。母親は、夜のうちからずっと出かけていて、朝も帰ってこない。お兄ちゃんは、学校にちゃんと通っているの、起こしてくれるが、弟は学校には来れない日が多くなる。僕も、毎日、起こしに行っていたのだが、起きることができず、学校に行けないことが続いた。放課後、家に行くと、朝はいなかったお母さんが、すごい恰好で出かけていったりするのを見たりする。お母さんも苦しんでいるというのは、わかっているが、どうしても自分の中に怒りというか、もっとちゃんと面倒見てくれよという思いがある。それでは何も解決はしないと思いつつ、弟をサポートしようと決意していた。毎日、迎えに行くと、僕にできることは、とにかく友だちと学校で学ぶことに希望を持てるようすることと決まっていた。地域の相撲大会に参加したいと言うので、クラスのみならず休み時間に練習したり、SDGsの学習で誰一人取り残さないということ、勉強した時には、周りの友だちが「でも、(報告の子)が取り残されてる。だったらこれやん」と言った時に、すごく救われた。見ると、周りの子は自分の暮らしを含めて、支えてくれているというのが、その子にとってすごく大きかったと感じた。ただ、やっぱり家の様子は変わらなくて、結局、学校から報告の子を保護するって話になって、2週間後

に、学校で保護された。すごく楽しそうにバスケットをして遊んでいたその日の休み時間が終わったところで、そのまま保護された。忘れられないすごい表情をしていた。報告の子にとって、それは良かったのか、悪かったのか、正直わからない。その時に、僕がもっと保護者のしんどさに寄り添えていたら、結果は変わっていたのかなと思った。学校でできることはやってきたつもりだったが、それ以外の場所で、家庭にまで踏み込んで、教師という立ち位置でどこまでできるか。限界はある気はするが、一人の人として、困ってる子どもを支えるために、保護者のしんどさに、もっと寄り添えたのではと、今もすごく感じる。報告の子と保護者から学んだことを今の学校でも生かそうと思っていたが、今、ちょっと自分はぶれているかもしれないと、この分散会で思い出させてもらった。気持ちを新たに明日から頑張ろうと思う。